

第20回スタディツアー 報告書

2008年

特定非営利活動法人
ヒマラヤ保全協会

目次

1. はじめに	4
2. 調査項目 - 問題提起-	5
2-1. 異文化に接し日本を見直す	5
2-2. 国際協力・環境NGOの活動現場を見る	5
2-3. 日本文化をつたえる	5
2-4. 山村の生活を体験する	5
2-5. ネパールの人々の暮らしと文化をまなぶ	5
3. フィールドワークの記録 -データベース-	7
3-1. 自然	7
ツーリズム (I-2)	7
山の景色 (I-6)	7
3-2. 森	7
村の森 (I-7)	7
サリジャとナンギの苗畑の規模 (Y-7)	7
3-3. 産業	7
村の産業 (I-10)	7
3-4. 村の暮らしと文化	7
二日目の朝 (M-9)	7
Do you know (M-5)	8
Do you know 2 (M-6)	8
コルポナ先生 (M-7)	8
コルポナ先生2 (M-8)	8
電気が来ていない村にTVとDVDプレーヤー (Y-2)	9
受け継がれる伝統の踊り (Y-1)	9
村での歓迎会を受けて文化の美しさを感じた (K-1)	9
3-5. 村の人々	9
山村の人々の心の暖かさ (S-2)	9
最後の夜 (M-10)	9
村の人は恥ずかしがり屋 (S-4)	9
最後の日 (M-11)	10
訪問者をチアでもてなしてくれるサリジャの人々 (Y-4)	10
3-6. ホストファミリー	10
ホストファミリー (M-1)	10
いとこ+隣の家、近所の子ども達 (M-2)	10
私のおみやげ (M-3)	11

私のおみやげ2 (M-4)	11
お母さんが「うちは貧乏だ」と言ったことについて (K-3)	11
出稼ぎ (S-5)	11
英語を話そうとしないホストファーザー (S-3)	12
3-7. 教育	12
学校を訪れて感じたこと (K-2)	12
教育 (I-9)	12
ポカラの学校に娘を通わせている (S-7)	12
3-8. 医療	12
医療 (I-8)	12
3-9. 子供	12
成長 (I-1)	12
少年 (I-3)	13
子どもの幸せ (I-5)	13
村の子ども (I-4)	13
子供の遊び (S-6)	13
子どもたちの遊び道具 in ナンギ (Y-6)	13
村の子どもたちはシャイ (Y-5)	13
サリジャ村の女の子はたくましい (S-1)	14
パワフルかつタフなサリジャ村の子どもたち (Y-3)	14
4. 参加者の感想	15
産業開発	15
忘れられない、家族との思い出	16
ネパールで感じたこと	17
一秒たりとも無駄にできない毎日	18
未知なる世界・初めてのネパール	19
5. 写真	22

1.はじめに



2008年2月11日～2月23日にかけて、ヒマラヤ保全協会・第20回スタディツアー（ネパール・ヒマラヤ・フィールドワークの旅）を実施した。テーマは「森林保全と参加型村落開発」であり、「百聞は一見にしかず、国際協力のフィールドへ！」をキャッチフレーズに、ヒマラヤ保全協会のネパール事業地を訪問し、国際協力の現場を見学、植林などの現地活動に参加した。

今回は特に、「フィールドワーク」に焦点をあて、異なる自然・文化・社会の中につかり、日本からでは見えにくい現地の様子を、自分の目で確かめ、心で感じ、様々なことを考える貴重な時間をつくりだした。

スタディツアーのポイントは以下の通りであった。

(1) 国際協力の現場を「フィールドワーク」！

ヒマラヤ保全協会の活動現場をフィールドワークする。この「出会い」と「発見」を通して、自らを成長させる。フィールドワークとデータカードの実習もする。

(2) 植林ボランティアとして、村人とともに汗を流す、感動！

ヒマラヤ保全協会がすすめている植林などの現地活動にボランティアとして参加、村人と交流し、ともに汗を流し、森林保全や村づくりに貢献する。

(3) ネパール山村の民家にホームステイ、24時間生活丸ごと体験！

現地の家庭でのホームステイで、村人の普段の生活にふれ、異文化を体験する。ホームステイを通して、その国の本当の姿を見る。

日程とプログラムは次のとおりであった。

No.	日付	曜日	場所	プログラム	食事	宿泊先
1	2月11日	月	Narita-Bangkok	移動(フライト)	機	ホテル
2	2月12日	火	Bangkok-Kathmandu	移動(フライト)→自由行動(カトマンДУ観光)→ミーティング(ヒマラヤの自然環境概説)	○ 機	ホテル
3	2月13日	水	Kathmandu-Pokhara	移動(バス)→ミーティング(ヒマラヤ保全協会のプロジェクト解説)	○	ゲストハウス
4	2月14日	木	Pokhara-Salja	移動(タクシー)→ヒマラヤ・トレッキングー村での歓迎会→ホストファミリーの家へ	○ ○ ○	ホームステイ
5	2月15日	金	Salja	森林保全プロジェクト・苗畑見学、植樹	○ ○ ○	ホームステイ
6	2月16日	土	Salja	村落開発プロジェクト見学→村人との交流・インタビュー	○ ○ ○	ホームステイ
7	2月17日	日	Salja-Nangi	ヒマラヤ・トレッキングーヒマラヤ(アンナプルナ連峰)展望	○ ○ ○	ロッジ
8	2月18日	月	Nangi	森林保全・村落開発プロジェクト見学→フィールドワークのまとめ	○ ○ ○	ロッジ
9	2月19日	火	Nangi-Pokhara	ヒマラヤ・トレッキングー移動(タクシー)	○ ○	ゲストハウス
10	2月20日	水	Pokhara	ミーティング(スタディツアーのまとめ)→自由行動(ボカラ観光)	○	ゲストハウス
11	2月21日	木	Pokhara-Kathmandu	移動(バス)→自由行動(カトマンДУ観光)	○	ホテル
12	2月22日	金	Kathmandu-Bangkok	移動(フライト)	○ 機 機	機中泊
13	2月23日	土	Narita	成田空港着(朝)、解散		

訪問先のサリジャ村ならびにナンギ村の皆様はあたたかく私たちにむかえいれてくださり、大変お世話になった。ここに明記して、これらの方々にふかく感謝の意を表する。

2. 調査項目 - 問題提起-

事前オリエンテーションならびにツアー中のミーティングにて、参加者から、調査項目や疑問点・質問事項を出してもらい、ヒマラヤ保全協会が実践している「参画型アプローチ」の中の「調査項目ネット」とよばれる図解法をつかって整理した。以下にその結果を列挙する。

2-1. 異文化に接し日本を見直す

- 現地の村民が日本人に持つ印象とは？
- 地域環境も文化も異なる私たち日本人とネパールの人々に何か共通点があるか？
- 様々な民族が共存するネパールを訪れることで、世界の人々の共存や、日本のことを見つめ直したい。
- 文化の違いや考え方の違いを知って、たくさんのことを学んでみたい。

2-2. 国際協力・環境NGOの活動現場を見る

- ヒマラヤ保全協会を通じてNGOの活動をしたい。
- 突然訪問してきた私たちにしてもらいたいことは？
- どのような支援をしていて、それがどの程度役立っているかを知りたい。
- 国際交流を通じて、自分達に何ができるかを知りたい。
- ネパールの自然環境について学びたい。
- 私の周りの環境は山も多く、自然に恵まれているけど、ネパールでの自然について学ぶことで身近な環境保護について考えさせられる。
- 自然の変化。特に環境悪化による自然の変化はあるのか。

2-3. 日本文化をつたえる

- ネパールの人に日本の文化を伝えたい（折り紙）。
- 日本文化を伝えたい。

2-4. 山村の生活を体験する

- サリジャの生活を見て、体験して私たちに何ができるかを学びたい。
- ネパール語を話す。
- ネパール語（コミュニケーションが取れる程度）を学びたい。
- 多くの人と触れ合って、コミュニケーションが上手にとれるようになりたい。
- 私たちの普段の生活と、どのくらいギャップがあるのか？
- 他国（日本など）に関して、どういうイメージがあるのか。
- 学校教育現場をみてみたい（何%くらいが学校へいつているのか）。
- 村として将来への不安は何か？また、問題はなにか？

2-5. ネパールの人々の暮らしと文化をまなぶ

- ネパール料理を習い、日本料理を伝えたい。
- ネパールの文化をしたい。
- ネパールの人にとって宗教がどのように生活に浸透しているかを知りたい。
- ネパール山村の家庭料理を教わりたい。
- ネパールの伝統工芸について知りたい。

- 日本との食事（料理）の違いを栄養面と比べて、それについて知りたい。
- ネパールの食べ物を教えていただき、作りたい。
- 今一番学びたいことは何か？訪ねること。
- カトマンドゥ（都市）とサリジャ（山村）の生活レベルの違いを見比べたい。

3. フィールドワークの記録 -データベース-

現地では、参加者各自が見たり聞いたりしたことを「データカード」に記録した。それらを、まとめのミーティングで「検索ネット」という図解法をもちいて整理した。以下にその結果を掲載する。

3-1. 自然

ツーリズム（I-2）

ミーティングの中でツーリズムに関して質問したが、やはり我々との考え方に大きな差を感じた。村の文化や生活、自然は大きな資源であり、それは十分エコツーリズムにつながる。そしてそれが、村の発展やサステナビリティになる要素だと思う。(2008.2.16 サリジャ村)

山の景色（I-6）

ポカラへの帰路、アンナプルナやマチュピチュレが見えた。山が見えると本当に気持ちいい。村人たちが山を自慢するように、この景色はみんなで守っていかなければいけないと思った。ネパールはゴミが大きな問題だが、先進国が一緒になってこの問題に取り組まなければならない。

3-2. 森

村の森（I-7）

鎮守の森は非常に多様性に優れていた。これまで単調であったり、植樹の森が多かっただけに、今日行った森には感動を覚えた。神を祀る森の木は切らないというまさに日本と同様の考え方だが、他では見られない空気があり、とても気持ちよかった。

サリジャとナンギの苗畑の規模（Y-7）

支援2年目のサリジャ村と疎遠の終了したナンギ村の苗畑の差はとても大きかった。サリジャでは苗畑の規模もあまり大きくなく、苗木の数も多くないが、11年間支援して現在は自分たちの力で苗畑を管理しているナンギ村の苗畑はさすがであった。苗木の種類も量も豊富で、植林する場所がもうないということでハーブなど新しい苗を自ら育て始めていたことに驚いた。IHCの支援をしっかりと受け継いで、森林を取り戻そうという気持ちが強く感じられた。(2008.2.18 ナンギ村 苗畑)

3-3. 産業

村の産業（I-10）

サリジャ村の織物やナンギ村の紙など、その土地の新しい産業を確立させるために、マーケティングやインフラなどの課題が山積みだと思った。作っても、それを排出する環境がなければ産業として成立しないし、低価格にしてしまうと、恒久的な継続が難しいだろうと思う。質とのバランスも、とても重要だと感じた。(2008.2.17 ナンギ村)

3-4. 村の暮らしと文化

二日目の朝（M-9）

2日目の朝、オニルとジットに村を案内してもらった。

ナーサリー：今日、ここでプランティングをやる。夜から朝にかけては苗の上にビニールをかぶせて竹の屋根をかける。昼間は太陽の光を浴びさせるためにそれらはずす。

サラサーティ寺院：バスケットコートの上にある。今日は扉が開いてないが普段は開いていて、中にはヒンドゥー教の神様の写真がある。

その後、3人でバスケットをした。ジイットは3ポイントシュートの練習をしてオニルはフリースローを練習した。

「今日は学校を休んでバスケットをやるんだ」と言っていた。

(Date:2/15 Place:サリジャ村 Source:オニル ジイット Recorder: M. S.)

Do you know (M-5)

オニルは「Do you know?」と言って「No」と言えば教えてくれる。

ガーグリ(水がめ)：オニルは楽に持ち上げたがとても重かった。

ナングロ(箕)：トウモロコシを入れて振らしてもらったが何のため使うものなのか言葉が通じなくて分からなかった。

ジャート(石うす)：真ん中の穴にトウモロコシを入れて実際に回させてもらった。思っていた以上に軽く回せる。

テキ：ミルクを入れて混ぜるための壺のようなもの、先にスクリューのようなものが付いている木の棒で混ぜる

太鼓：10cm×30cm程の大きさで、両膝にひもを引っ掛けて座ってたたく。難しかった。

パインユ(桜)：日本のポストカードを見せたときに外に出て教えてくれた。葉が落ちてから花が咲く。

(Date:2/14 Place:バハドール家 Source:オニル ジイット Recorder: M. S.)

Do you know 2 (M-6)

オニルとジイットの名前をひらがなとカタカナで書くと、今度は逆に私の名前をネパール語で書いてくれた。家の中にある神様の絵を見せてもらった。シバとパールバディ。

コルポナさんはSONYのデジカメを持っていていろいろ映像を撮っていた。今年の10月13日に降り積もった雪、村の向こうで行われている工事現場、テレビの映像。

ちなみにこの家はどの部屋にも電気が通っていたし、コンセントもあった。

(Date:2/15 Place:バハドール家 Source:コルポナさん オニル ジイット Recorder: M. S.)

コルポナ先生 (M-7)

頭のいいコルポナさんは英語で様々なことを教えてくれる。私がいればノートでスペルや絵を使って教えてくれる。

サラサーティ寺院へのお参り：皿に2ルピー、花を3本、米、黄色い粉をのせて寺まで行き、ルピーを寺の中に入れ、花を寺のそばに備え、米と粉を寺の周りに撒いて祈った。

ロキシの作り方：ジャンという練り物を大壺に入れてその上にお湯を入れた小壺を置き熱する。

サリジャの学校では生徒も先生も日曜～木曜は同じ服を着て、金曜は洗濯の為、いつもと違う服を着て登校する。

(Date:2/15 Place:バハドール家 Source:コルポナさん クマール Recorder: M. S.)

コルポナ先生 2 (M-8)

学校ではコルポナさんは3年生にネパール語を教えている。3年生は12人、全校生は62人いる。

学校の教科書を見せてもらった。コルポナさんが時々説明してくれる。数学の教科書は1冊の中に足し算・掛け算、引き算、分数が書かれてある。日本だと1年生・和差、2年生・積商と分かれているのに…。理科の本、ソーシャルワーク、ネパール語・英語の本も見せてもらった。ネパール語の本には「ウサギとカメ」の話が絵と共に書かれていた。

(Date:2/15 Place:バハドール家 Source:コルポナさん Recorder: M. S.)

電気が来ていない村にTVとDVDプレーヤー（Y-2）

夜ご飯を食べた後ディディがおかしなことを言った。「ネパリ、ティービー、ザヌ？」ネパールのテレビ行く？電気がきていなくて、かろうじてソーラーで充電した電灯を使っているサリジャ村にテレビ？不思議に思いながらもついていった家の奥の部屋の戸を開けた瞬間、10畳ほど部屋に20人以上の人々が集まって真っ暗いなか、ラブストーリーをDVDで見ていた。とても山奥の村に滞在しているという感じがしなかった。

(2008.02.15 サリジャ村 歓迎会)

受け継がれる伝統の踊り（Y-1）

自分たちの村の伝統芸能を若い世代の人々がしっかりと受け継いでいる。私たちがサリジャ村に着いたさい、村の伝統的な踊りを若い女性たちが寒いにも関わらず、また日が暮れて暗くなったにも関わらず4曲も見せてくれ、突然訪ねてきた見知らぬ日本人のためにそれらも見せてくれたことに対し、とても友好的な心と植林プロジェクトへの積極性が見られた気がする。(2008.02.14 サリジャ村 子どもたち)

村での歓迎会を受けて文化の美しさを感じた（K-1）

長い長いトレッキングを終えて村に到着すると、村の方々が集まって、突然訪れた日本人にも両手を合わせて「ナマステ」と笑顔で挨拶をしてくれた。

歓迎会に見させて頂いたネパールの踊りに感動して寒さも忘れてリズムに乗ってしまうほどだった。衣装も鮮やかで美しく、ステップや動き（手の細かな動き）も美しく、自分の国の“踊り”という文化を外国人に披露し、相手を感じさせることができるということは、相手に自分の国のことをもっと知ってもらい道へとつながって行くことにもなるので、私も、私の国“日本”という国の文化をもっと大切に守り、外国の人を感動させ、日本に興味をもってもらえるようになればいいなと思った。

(Date: 2008年2月14日 source: K.M Place: サリジャ村 Recorder: K.M.)

3-5. 村の人々

山村の人々の心の暖かさ（S-2）

ベニからサリジャへ歩いて向かう道の途中、いくつかの集落があり、人々に“ナマステ”と声をかけると、笑顔で“ナマステ”と返事を返してくれた。私たち外国人を笑顔で歓迎してくれるネパール山村の人々の心の温かさを感じた。

(Date: 2.14 source: 村人 Place: ベニ～サリジャ Recorder: S.N.)

最後の夜（M-10）

最後の日の夜、おじいちゃんが「エー、チョラ」と言った。コルボナさんが横に来ておじいちゃんが言っていることを通訳してくれた。「4年前に息子がアブダビに行った。今、あなたがサリジャの私の家に滞在している。あなたは息子と同年で息子に似ている。新しい息子ができて嬉しい」そして「エー、チョラ(息子)」と連呼していた。ありがとう父さん。「ダンネバードは日本語でありありがとうございます」とコルボナさんに伝えて、お父さんの方へ正座をして座りなおし、両手を膝の上ののせて「ブバ、ありがとうございます」と御辞儀をした。

(Date: 2/15 Place: バハドール家 Source: ティルさん Recorder: M.S.)

村の人は恥ずかしがり屋（S-4）

ホームステイ第一日目の朝、お母さんと写真を撮ろうとしたらはずかしがって顔をかくされてしまった。昨晚家まで案内してくれた女の子、ニルマラとコンマヤの2人も私がカメラを向けると、照れ笑いをしてと

でも恥ずかしがっていた。

日本人も見知らぬ外国人に対して恥ずかしがってあまり自分から話しかけない人が多いので、ネパールの人と日本人は似ていると思った。

(Date: 2.15 source ホストマザー Place: ホームステイ先 Recorder: S.N.)

最後の日 (M-11)

最後の日の朝、早起きして手紙を書いた。表の上半分は、指差し会話長を見て片言のネパール語、下半分は中高レベルの英語、裏の全面を使って日本語で書いた。それをコルポナさんに渡して、日本語の文章をジェスチャーと英語で説明した。コルポナさんは手紙をしまい、小さな籠をプレゼントしてくれた。「サリジャ村のことを忘れないでください」と言ったので「サリジャ村のことを忘れることができない」と言いそれを受け取った。

「アイ ホープ ユア サクセス」と言ってくれた。ありがとう。

(Date: 2/16 Place: バハドール家 Source: コルポナさん Recorder: M.S.)

訪問者をチアでもてなしてくれるサリジャの人々 (Y-4)

サリジャ村へ来てまず学校の先生のお家へ行くと、チアでもてなしてくれた。これは始めてきたお客さんに対して“ようこそ”という意味でふるまってくれるものだと思っていた。しかし、訪問する家々でチアや軽いおつまみのようなものでもてなしてくれる。聞いてみると、こちらでは訪問する人誰にでもチアでもてなす習慣があるようだ。そのような習慣は現在の日本では田舎のほうでは見られるが東京のような大都会では見られない習慣で、とても友好的なもので良いと思った。

(2008/02/16 サリジャ村 村の人々)

3-6. ホストファミリー

ホストファミリー (M-1)

ひいじいちゃん ヌンドゥ バハドール コオールツァ 96歳

隣の部屋で眠っている 耳が聞こえないらしい。

じいちゃん テイル バハドール コオールツァ 62歳 常に喋っている

ばあちゃん マヤ 55歳

ロキシ好きの二人は畑でジャガイモを育てている農民。

父さん サローツ 26歳

アブダビでネパール料理のコックをしている。

母さん コルポナ 25歳

3年生にネパール語を教えている先生、オックルニ村出身の姑さん。英語が喋れて様々なことを教えてくれる。

娘さん アスマ 5歳

活発で走りまわっている。

(Date: 2/14 Place: バハドール家 Source: コルポナさん、オニル Recorder: M.S.)

いとこ+隣の家、近所の子ども達 (M-2)

兄さん ジェット バハドール コオールツァ 17歳 10年生

数学とバスケットが好き。英語は喋らない、おとなしいが優しく接してくれる。

弟 オニル バハドール コオールツァ 14歳 8年生

英語が好きで、ブランコが趣味。とても積極的な性格で英語でどんどん喋りかけてくれる。彼がいてくれて助かった。

隣家の息子さん ビッグス

いつもアスマと遊んでいる。写真、カメラが大好きでカメラをポケットに入れるとポケットの中を探そうとする。

ビッグスの兄 クマール 7歳 近所の子 ビッナ 7歳 オニタ 10歳 4年生

(Date:2/14 Place:バハドール家 Source:コルボナさん Recorder: M.S.)

私のおみやげ (M-3)

万華鏡：使い方を説明すると、みんな食い入るように見続けていた。

ポラロイドカメラ：ポラロイドカメラで子供たちひとりひとりの写真を撮ってプレゼントした。すぐにフィルムがなくなった。みんな喜んでくれた。

日本の絵葉書、家族の写真：オニルは私の父はナイスだと言ってくれた。

折り紙：折り紙で作ったハトとアジサイを子供たちにプレゼントした。オニルは折り紙を知っていて、ボートを作ってくれた。

折り紙の本：折り紙の本と折り紙を使ってオニルとジイトと一緒にちょうちょとハトとだまし舟を作った。だまし舟でオニルを騙すと、おとなしいジイトが急に大笑いしました。

(Date:2/14 Place:バハドール家 Source: Recorder: M.S.)

私のおみやげ2 (M-4)

神戸ゴーフル+アーモンド：日本のお菓子ではなかったことを後悔。

一緒に食べてみたが、みんな一口しか食べてくれなかった。

コマ、竹とんぼ：コルボナさんは竹とんぼのことを知っていた。

(Date:2/14 Place:バハドール家 Source: Recorder: M.S.)

お母さんが「うちは貧乏だ」と言ったことについて (K-3)

お母さんと“指さし会話帳”を使って話をしていると、「貧乏」という文字を指差して、「家はお父さんもないし、2人の子供も育てないといけないし、毎日たくさんの木を運ぶのも大変。家は貧乏だよ。」と言うので、いろいろと考えた。

貧乏には明るい貧乏と暗い貧乏がいると聞いたことがあるけれど、私がホームステイした家は決して貧乏ではなかった。私の(日本の)家のようにたくさんの物や便利なものは何もないけれど、毎日おなかいっぱい食べられて、みんなでおしゃべりをして笑って…

それが本当の幸せだと感じた。

(Date:2008年2月15日 source:ホームステイ先のお母さん Place:サリジャ村 Recorder: K.M.)

出稼ぎ (S-5)

ホストファミリーのお父さんの兄弟は2人ともサウジアラビアへ出稼ぎに行っているとのこと。お父さんは家で家畜の世話をしているだけで、お母さんが学校の先生として働いていた。家で農業をしているだけでは現金が入らないので、どうしても外国へ行って働かなければならない状況であることを知って悲しくなった。

(Date:2.16 source:ホストファーザー Place:サリジャ村 Recorder: S.N.)

英語を話そうとしないホストファーザー（S-3）

ホームステイ先のお父さんは英語が話せるのになかなか使おうとせず、ネパール語でしゃべってからからやっとなら最後にならちよろちよろとだけ英語で言うので、もどかしく感じた。笑顔がすてきで、日本と一緒に歩いて行きたいといってくれたり、乳搾りをやらせてくれたりと優しい人だったので、もっと英語で話をしたかった。

(Date : 2.15 source ホストファーザー Place : サリジャ村 Recorder: S.N.)

3-7. 教育

学校を訪れて感じたこと（K-2）

日本の学校は、横にはガラス窓、天井には蛍光灯（昼間でも）と、とても明るく勉強のしやすい環境が整っている。サリジャやナンギの学校は、横にある窓も小さく、天井に電気もなく、とても薄暗かった。その中でも一生懸命に勉強している姿を見ると、せめて天井を透明の屋根に変えるだけでも非常に明るく、目も悪くならないし、勉強のしやすい教室に変わるだろうと思った。

(Date: 2008年2月15日 source:小池 みず希 Place:サリジャ村, ナンギ村 Recorder: K.M.)

教育（I-9）

村の教育環境は、想像していたよりも整っていた。以前報道で、女の子の就学率が低い村を見たが、サリジャやナンギはおそらく恵まれている方なのだろうと感じた。今後グラミン銀行などの制度が世界に広がり、女性が働け、社会的地位が向上していくことを願う。(2008.2.19 ナンギ村)

ポカラの学校に娘を通わせている（S-7）

ナンギ村で私たちの夕食の世話をしてくれた先生は娘をポカラの小学校に通わせている。9才だそうだ。月に1200ルピーかかるけれど、やはり都市のいい学校に通わせたいので仕方がないと笑っていた。ポカラには年に2～3回しか会いに行かれないと言っていたので、娘さんも寂しがっているだろうと思った。

(Date : 2.17 source 学校の先生 Place : ナンギ村 Recorder: S.N.)

3-8. 医療

医療（I-8）

ナンギ村の診療施設には、高度にも関わらず最低限のものは整っていた。これにはやはり、電気が来ていることが大きいし、看護師も毎年新しい医学を学んでおり、村での医療レベルはクリアしていると思った。電気があれば情報も入手でき、医療に電力の普及は欠かせないと思った。(2008.2.18 ナンギ村)

3-9. 子供

成長（I-1）

村の子どもたちは、朝早くから起き、家の手伝いをし、悪いことをしたり、言うことを聞かなかつたら、大声で本気で親に叱られ、夕方は暗くなるまで近所の子どもたちと遊ぶ。遊ぶのは、同世代だけではなく、年の離れた子もみな一緒に、年長者は、幼い子どもの面倒を兄妹に関係なくみる。子どもの成長過程に必要なエッセンスが生活の中にたくさんあり、村づくりに必要な人間関係づくりが、必然と幼少期からできていた。(2008.2.15 サリジャ村)

少年（I-3）

早朝、モホンという少年、そしてカティカという6歳の少年と尾根までの登山をした。あいにく天気が悪く、アンナプルナの一部が見えただけだったが、そこに私を案内しようと思ってくれた気持ちが本当に嬉しかった。途中、薬草のことを話してくれたり、花の説明をしてくれた。彼らの温かいもてなしの心を感じた。（2008.2.16 サリジャ村）

子どもの幸せ（I-5）

村の子どもたちを見ていると、ここで生まれた方が幸せなのか、日本で生まれた方が幸せなのか考えてしまう。日本には、当然のように教育があり、裕福なくらしがある。しかしここには、人間性を構築する環境があり、多くの人に囲まれて育つ。日本には薄れてきた生活環境である。この子どもたちに、その人間性をアウトプットする場や、父親とくらすことができれば、もっとすばらしい地域になると思う。（2008.2.16 サリジャ村）

村の子ども（I-4）

カティカという少年は本当によく働く。6歳であるためよく叱られるが、家畜を絞める際でも、大人に交じり、自分ができる仕事をしっかりとやっていた。6歳でありながら自らが考えて行動ができる環境があるのはすばらしいと思った。とてもたくましさを感じた。反面、私の持っていたカメラやPCを自分のもののように友人に説明している姿は、とても子どもらしく微笑ましかった。（2008.2.16 サリジャ村）

子供の遊び（S-6）

ナンギ村の学校で子供たちと遊んだ。ボールがないので、ビニール袋のひもを結んでボールの代わりにして遊んでいる子供たちを見て、何でも遊びの道具にしてしまえる力を持っているのだと思った。日本はおもちゃに溢れていて、本来子供が持っている遊ぶ力というものが発揮されなくなっているのではないかということに、ネパールの子供たちを見ることで、気付いた。

(Date : 2.17 source 子供たち Place : ナンギ村 Recorder: S.N.)

子どもたちの遊び道具 in ナンギ（Y-6）

ナンギ村では学校訪問をして、授業が終わった子どもたちと一緒にグラウンドで遊ぶことができた。近くでバレーボールをしている子どもたちがいたのだが、そのボールは黒いビニール袋の中に何かを入れて作ってあるものだった。ナンギ村に限らず山村の子どもたちは何でも遊び道具にしてしまうのだ。道具を使わなくてもグラウンドの土手や電柱など周りにあるものすべてが遊び道具になってしまい、体をいっぱい動かして遊んでいる子どもたちを見て、日本ではそういう遊び方をする子どもたちを最近はそう多く見ることができなくなったなと感じた。（2008.02.18 ナンギ村 学校の子どもたち）

村の子どもたちはシャイ（Y-5）

私たちが村に着いた日、村の子どもたちに「ナマステー」と声をかけても不思議そうな顔をして見ているだけか、難しい顔をして「ナマステー」と答えてくれるだけだった。2日目になっても、少し笑顔を少し笑顔を見せてくれたが「ナマステー」と言うとすぐに逃げてしまうの繰り返しだった。しかし2日目の午後から手を繋いだり、頭をつつきあったりと打ちとけあうことができ、近所の女の子はネパール女性のメイクをしてくれ、おまけにおでこにティカをつけてくれ、短期間にとっても仲良くなることができた。最終日にはお互い疲れないようにと写真を交換し合い、友好関係をより深めることができた。（2008.02.17 サリジャ村 村の子どもたち）

サリジャ村の女の子はたくましい（S-1）

サリジャ村に着き、いよいよホームステイ先へ向かう。

私の重い荷物を軽々と持ち上げ、女の子二人がホームステイ先の家まで連れて行ってくれた。十何キロもある私のバッグを担ぎながら笑顔で話しかけてきてくれた彼女たちの心の優しさとたくましさに心を打たれた。

(Date : 2.14 source : サリジャ村の女の子 Place : サリジャ村 Recorder : S.N.)

パワフルかつタフなサリジャ村の子どもたち（Y-3）

どこの国でも子ども達はとっても元気が良いが、ここサリジャ村の子ども達は日本の子ども達の1.5～2.0倍元気が良い。朝、起きるとまず”しゃくなげの花”を見せてくれるとって私の手を引きその場所まで連れて行ってくれた。子供たちは裸足で木登りをはじめ、木になったしゃくなげの花をいくつも採って私にプレゼントしてくれた。浅野寒い中、裸足で木に登るサリジャの子供たちのタフさは、同じ年だった頃の私とは比べものにならない。帰ってくると採ってきた花を私の頭につけてくれ、そしてネパールの歌とサリジャ村の歌を披露してくれた。私も日本の歌を歌ってあげると次の歌次の歌ととても喜んで聞いてくれた。

(2008.02.15 サリジャ村 村の人々)

4. 参加者の感想

産業開発

I. K.



少年と牛

今回ツアーに参加させていただき、途上国のさまざまな環境側面を知ることができた。ひとつは自然環境。それから労働環境や教育環境などである。そしてそれらは、全て切り離せない要因として、山岳民族の生活に直結していた。

ネパールの自然環境について、これまで全く無知だったためか森林の少なさに大変驚いた。人類が高い所まで生活圏を移動していき、それに伴い森林が切り開かれていったわけだが、想像以上の山の姿だった。車窓から見るだけで一目瞭然であった。

労働環境においても、最初に訪れたサリジャ村で、

歓迎の踊りの男性パートを、男装した女性が踊っているのを見て、本当に若い男性がいないのだと痛感した。日本の過疎村と同様であるが、発展していかない典型的なケースである。

教育環境については、村により修学年数が違うという先進国では考えられない状況であった。しかし、今回訪れたサリジャ、ナンギ両村については、子どもは全員修学しているということで、おそらくネパール山岳民族の中でも修学環境は整っている方であろうと想像できた。

これらの問題を一気に解決することは不可能だと思うが、これら全てに関連してくるのが、現金収入を伴う産業開発であろうと感じた。そういった意味では、IHCが取組んでいる活動は合理的であると思った。IHCの主とする活動である森林再生は、今のネパールをはじめ隣国のインドまでも含めた環境保全である。また、ミツマタなど紙作りに欠かせない種の植林も、里山再生、そして持続可能な産業に向け必須の取組だと感じた。

そういった取組が進んでいくと、徐々にではあるが村に職が生まれ、出稼ぎに行かなければ生活ができない家庭も、少しずつ減少していくように思える。人の流出が抑えられれば、人材育成や農地放棄といった問題も、解消傾向になるだろう。

教育環境は、その差があることに今はあまり表面化していないのかもしれないが、この先急激に差が出てくる気がしている。まず、現在の40代以上の人はかなりの割合で英語教育を受けていないことに気づいた。現在の学校では、日本でいう小学校1年生から学ぶことができる。実に親子2世代だけでもこれだけの差がある。アジアの途上国の多くに言えることかもしれないが、以前は特に女性に就学機会が薄かったようにも感じた。この先修学年数に差があり、さらにその上の修学に差が発生し始めると、就学機会の問題とはまた違った問題が浮上してくるに違いない。

産業開発はこれらの問題に直接リンクする対応策であるが、ややもすれば国内格差を広げることにも繋がりがねない。しかし、進めていかなければ打開には繋がらず、産業インフラ（特に販売経路）を含め着手し

なければいけないと感じた。

忘れられない、家族との思い出

M. S.

今回のスタディー・ツアーで私達はサリジャ村とナンギ村を訪問した。サリジャ村では植林体験・学校・織物工場を見学し、ナンギ村ではインターネット施設・学校・養殖施設・製紙工場などを見学した。IHCの支援が終了したナンギ村と支援を始めた段階のサリジャ村とを比較することで、このIHCが行っている支援の大切さを実感することができた。

ナンギ村ではロッジで2泊し、現地の人たちとは直接会話をする機会が少なかったのに対し、サリジャ村での3泊はホームステイ体験ということもあって、現地の人たちや家族の温かさに直に触れ合えるいい機会となり、私にとって忘れられない思い出となった。

私が滞在した家は、祖父・父親・母親・息子・姑・孫娘の4世代6人の家族構成だったが、息子は数年前にアブダビへ出稼ぎに行ってしまったため5人で暮らしていた。そして偶然にもその息子と私は同い年だった。そのこともあってか父親のティルさんは私のことを「チョラ（息子）」と呼び、私より一つ年下で姑のコルポナさんには本当の妻のように世話をしていただいた。家族の方々は私に「ニューファミリー」と言って温かく迎え入れてくれ、私は人見知りの性格にもかかわらず、すぐに家族に馴染むことができた。

サリジャ村生活の一日目と二日目は、ホームステイ先の家族の従兄弟のジット（17歳）とオニル（14歳）が私の身の回りの世話や村の案内などをしてくれた。英語が好きなオニルは私にネパールの農具や絵を持ってきては説明してくれ、おとなしいジットは横からサポートする。彼らとはバスケットボールや折り紙をして遊んだりもして、片言の英語で多くのことを話し、最後にはお互いにベストフレンドだと言い合った。

二人に寺を案内してもらった帰り道のことだった。オニルが「日本は裕福だ。日本はナイスな国だね。でも、ネパールは貧しい」と私に言った。私は曖昧に相槌を返すだけで、何と言えいいのか分からなかった。それは単に日本を褒めるようなつもりで言ったのかもしれない、でも私はその一言を聞いて様々な想いが頭を過ぎった。彼らは先進国日本から来た私を見てどういうことを感じているのだろうか。私の心の中では「日本は裕福だが、社会に束縛されすぎてるせいか日本人を見ても幸せそうにみえない、サリジャの人をみていると大らかで、日本の人よりずっと幸せそうに、楽しそうに生きているように見える」と感じていて、逆に羨ましくも思っていた。だがそれは私の間違った見方であり、実際サリジャ村では多くの家庭に電気が通っていないし、ガスもテレビもなかった（例外もあって、私のホームステイ先にはなぜか電気がついていたのだが）。そして、村では働き盛りの男性の姿をあまり見かけなかった、多くの男性は出稼ぎに行っているからだ。この村の多くの男性が外国に出稼ぎへ行くようにジットやオニルも数年後にはこの村から離れて異国で働くのだろうか。彼らは村を離れて何年も外国で働くことを望んでいるのだろうか、そうではないと思う。



サリジャ村を出発する日の朝、コルポナさんは私の前に手作りの籠とラリグラスの花を持ってきて「これをあなたにプレゼントします。サリジャのことを忘れないで」と言った。私は忘れないことを約束して受け取った。最後に彼女は「あなた達日本人がここでやっていることはとても素敵なことです、私達は嬉しいです」と言った。サリジャ村の人たちはIHCのプロジェクトに対して前向きな意志を持っていたし、私達日本人を温かく受け入れてくれた、そのことが嬉しかった。

この植林活動を活かして、育てた木からサリジャ村独自の紙製品や布製品を創り出し、サリジャ村が自立して、彼らが出稼ぎを頼らずにサリジャ村で働けるようになってほしい。

私はサリジャ村、ナンギ村、ネパールを忘れない。またいつかネパールに行きたい。そのときはサリジャ村とナンギ村を訪問したいと思う。

ネパールで感じたこと

S. N.



私にとって、今回のネパールでのフィールドワークの旅は驚きと感動の連続だった。この旅に参加する以前はネパールについて知っていることはエベレストがあることぐらいだったけれど、旅が終わったとき、私すっかりネパールのファンになってしまった。

今回の旅では、日本には知ることのできないネパールの現状を知ることができ、ネパールが直面している様々な問題の深刻性を肌で感じた。特に環境破壊がひどかったことが私にとってとても衝撃的だった。首都カトマンドゥの空気の汚さ、ゴミが

道端に散乱している様子などにはとても胸を痛められ、山村の森林が伐採され山の斜面がむき出しになっている景色を見て、私たちに何かもっとできることがあるのではないだろうかという気持ちになった。

ネパールの現状を目の当たりにして大きなショックを受けたけれど、その一方でこの国の持つ独特の魅力にとっても惹きつけられ、もっともっとこの国について知りたいと思った。誰に対しても笑顔で「ナマステ」と手を合わせて挨拶をするネパールの人々にはすぐに親しみを感じることができたし、また様々な民族の人々が共存する様子はとても感動的だった。

何よりもサリジャ村での村の人々との交流は一生忘れられない大切な思い出だ。ホームステイをしたサリジャ村では日本ではめったに経験することができないようなことばかりを体験できた。私たちがサリジャ村に到着すると、村の女性たちが伝統の踊りを披露してくれ、またラリグラスの花輪を首から掛けてくれた。私はその村の踊りの美しさ、華やかさに感動し、また彼らの温かい歓迎のもてなしに心を打たれた。伝統の踊りが若い女性たちにきちんと受け継がれていることにも感銘を受けた。ホストファミリーの人たちはとても親切で、ネパール語をいろいろ教えてくれたり、ごはんのおかわりを何度でも進めてくれたりと、言葉の通じない私を笑顔で温かく迎えてくれ、彼らとの交流はとても楽しかった。

電気がないサリジャ村ではお風呂に入れなかったり、夜暗闇の中で過ごさなければならなかったりと最初は慣れない環境に少し戸惑いを覚えたけれど、村での生活を続けるうちにその生活に慣れてしまい、不便ながらも、ゆったりとした時間の流れる村の生活にとっても魅力を感じた。逆にスイッチひとつで何でもできて

しまう日本は、日々の生活が便利になり過ぎてしまっているのではないかと日本に帰ってきた今思う。日本でずっと生活してはこのようなことには気付きにくいので、そういった面からも、サリジャでの生活は本当に貴重な体験だった。

子供たちのとびきりの笑顔は今でも目に焼きついていて、もう一度会いに行きたくなってしまふほどだ。小学校で子供たちと折り紙や鬼ごっこをして遊んだけれど、みんなすごく元気で、楽しそうにはしゃいでいて、なんて純粋な子たちなのだろうと思った。

ネパールは貧しくて様々な問題を抱えているけれど、日本人が失ってしまった素朴な温かさ、純粋さが残っていると思った。それはネパール人の心の豊かさでもあると思う。あの子たちの未来が いったいどのようなものになるのか、今後ネパールがどのように発展していくのか、いつかネパールを再び訪れたとき、どのように変化しているのかがとても気になる。貧困や公害など様々な問題を抱えたネパールを私も何らかの形で支援していきたいと思った。

一秒たりとも無駄にできない毎日

K. M.

会う人会う人みんなに「ナマステ〜！」薪運び中のおばあさんも頭から両手をはなして「ナマステ〜！」私は何回ナマステと言ったのだろうか？私はいくつの優しく温かい笑顔に出会ったのだろうか？「こんにちわ！」って日本では毎日そんなに使わない。知らない人だったら目も合わせない。同じ“こんにちわ”なのに日本では自然に、素敵な笑顔があふれるあいさつをしているかなあ…。日本でも旅人になったつもりで周りの景色を見て感じて、出会う人にも素敵なあいさつをしたいと思います。



トレッキング中は少し歩いただけで暑く、足元は牛のふんだらけ！しかし周りに咲く花や緑が美しく、時々休憩がとてもきもち良く感じました。

サリジャ村に到着し、歓迎会に見せて頂いたネパールの踊りは、リズム感もよく、のってしまうほどでした。化粧の仕方や衣装にも特徴があり、文化の違いって面白いなと感じました。そのダンスはとても綺麗で感動し鳥肌が立ちました。彼女たちがネパールの伝統的なダンスを外国人に見せて、外国人を感動させることが出来るなんて素敵なことで、文化を大切に守っていることはもっと素敵なことと感じました。そう考えたら、私も日本の文化を守り、身につけ、外国人を感動させ、日本に興味を持ってもらえるように何かをやろう！と思いました。

それぞれのホストファミリーの家に行くときに、私の重たいリュックをかつぎ、どんどんと歩きたくましい女の子！辺りが暗いこともあって、この家お母さんだと思っていた子が16歳で、私よりも年下だと知ったときは驚きました。サリジャ村の女性はみんな元気で男に負けず、たくましく、私も負けてられない！と気合が入りました。

便利な電化製品に囲まれた国に生まれ、そんな環境の中に育った私は、電気さえ来ていない村での生活に興味があり、わくわくしていました。夜は囲炉裏の火が温かく、安心感を与えてくれました。ホストファミリーとみんなで囲むその小さな集まりは、初めての海外できっと心身ともに緊張と疲れがたまっていたはずのわたしの心と体をホッとさせてくれました。私は、食事中にテレビに集中して会話の少なくなった家族団

らの生活より、みんなで囲炉裏を囲んでおしゃべりしながら笑ったり、考えたりする生活のほうが幸せなのではないかと感じました。

お母さんの作るダルバート！どこの家も同じようでしたが、ご飯が大盛で、長時間のトレッキングでお腹がペコペコだった私にとっては嬉しい限りでした。しかしお母さんも子供も結構な量をペロリとたいらげてしまい、その分たくさん働いて、たくさん動いているのだなと思いました。

朝が苦手な私ですが、“はと”と“にわとり”の騒がしさにはいつまでもじっとしてられない朝が来ました。早起きしたつもりが、家族のみんなはもうとっくに起きていて、16歳のグマプンは「School!!」と言って6:30amに家を出て行きました。そのとき、「いってらっしゃい!!」と言いながらも、毎日毎日こんなに朝早いと、冬は霧も巻いていて寒いのに…。やっぱりたくましいな！と感じました。このたくましさは、生活の中にある“運動”と、お母さん手作りのダルバートをしっかり食べる事で、健康で丈夫な体が自然とつくられているところから来ているのかなあと感じました。“生活習慣病”という言葉がありますが、車が無い分動き、余計なものが含まれていない手作りの食事を多く摂り…と、この村では、普段の生活の中で、健康で丈夫な心と体が自然とつくられている気がしました。

テレビや車、偏った食生活…。便利で楽しい日本での日常。しかしその便利さのせいで失われつつあるものが本当にあるのだと、実際にサリジャ村で過ごして感じる事が出来ました。

以前に植林された苗木が大きく育ち、緑が増えた箇所もあれば、植林が必要な箇所もさまざまでした。森林保全継続の収入を得るために行っている織物。

村の女性達が、彼女達が織物をする建物についてミーティングしたり、私たちに一生懸命に織り方を教えてくれる姿を見ていると、彼女達は、森林保全のためにすべてを誰かに頼るわけではなく、自分達で収入を得られるということが、本当に嬉しいことなのだろうと感じました。

ナンギ村の学校の図書館に“知識は使ってこそ意味がある”とありました。このスタディーツアーで知ったこと、得た知識も無駄にしないようにしなくてはなりません。スタディーツアーでの2週間は、ネパールで出会ったたくさんの色のようにカラフルで濃く、一秒たりとも無駄に出来ないほど、充実した毎日でした。

未知なる世界・初めてのネパール

Y. Y.



人種も言語も習慣もすべて異なる、世界一高い山々のふもとに生活の場を持つ国ネパール。飛行機がカトマンドゥに近づくにつれ、私の胸は興奮の鼓動でドキドキと止まらなかった。カトマンドゥに到着してまず目に飛び込んできたのは物凄い車の量と人の数。建物の間の細い道をこれでもかというくらいのスピードで車を進めていくとぎやかなお店が連なる“タメル”に到着した。お店の店員さんたちは東洋人の私たちを見るとすぐに「ニーハオ！アニョハセヨー！コンニチワ！」と3ヶ国語で声を掛けてく

る。それほど中国・韓国・日本からの観光客が多いということだろう。にぎやかな店や人が溢れるタメルの中にも物乞いをする人や、移動販売でフルーツやポップコーンを売ってお金を稼いでいる人たちも多く見られた。そういった人たちはやはり自分の店を持つ人たちとは少し雰囲気の違い、旅前に聞いていた未だ色濃く残るカースト制というものを強く感じた。初めて味わうネパールのミルクティ、初めて食べたチベット料理は初めてのネパールで感じる独特の雰囲気も手伝ってとてもおいしく頂けた。

次の日はいよいよポカラに向けて出発。途中のランチタイムには初めてのネパール料理、ダルバートを食うことができた。この先ダルバートの日々が続くとは知らずに私はお腹いっぱいダルバートを楽しんだ。6～7時間バスに揺られ到着したポカラは、騒然としたカトマンドゥとはうって変わってちょっとした田舎町であった。といってもレイクサイドの観光名所では英語や日本語の達者な店員たちが店を広げ、大きな声で「コンニチワ」と声を張り上げていたが、一歩町の中に入ると砂利道を放し飼いされた牛や野良犬たちが人々と一緒に生活するのどかな風景が広がっていた。そんな風景の中を散策している時間は、忙しい日々を過ごす日本では感じられない、ゆったりとした時間を感じることができた。

ポカラで1泊したあと、いよいよサリジャへ向かうため、登山口であるベニへ移動。トレッキング前の腹ごしらえにネパールへ来て2回目のダルバートを頂いた。そしていよいよサリジャへ向けて出発。歩き出しは快調、すれ違う人すれ違う人に胸の前で手を合わせて「ナマステ〜」と声を掛けるのがとても新鮮で気持ち良かった。途中、休憩したお店で飲んだチアも格別においしく、体の隅々までチアが染み渡るのがわかった。トレッキング中、驚いたことが2つあった。ひとつは山を登ったり下ったりするネパール人たちの履物だ。みんなサンダルを履いて石でゴつゴつした山道を登ったりくだったりしている。トレッキングシューズでがっちり足を守っている私にはとても信じられない光景であった。もうひとつは歩いている道のところどころに目に付くごみである。半端ない量のごみに加え、そのごみをよく見るといかにも他国から輸入したスナックやインスタントヌードルのプラスチックの袋なのである。誰が捨てるのか、こんなローカルな場所にこんなにごみを捨てるだけのトレッカーが来るわけもない、やはり地元の人々なのだろう。ごみのポイ捨ての現状を見たとき、こんな美しい自然に囲まれた美しい国といわれている国もさまざまな問題を抱えているのだなと実感した。

ちよくちよく休憩をいれ、ついに7時間かけてサリジャに到着した。到着すると村人はすぐにチアで私たちをもてなしてくれ、そのあと村の伝統的な踊りで私たちを歓迎してくれた。ちゃんと伝統が次の若い世代へと受け継がれていることがとても印象的であった。村人たちは外が暗くなったにも関わらず、また日が暮れて寒さも増してきたにも関わらず私たちのためにすばらしい歓迎会を催してくれた。いくらプロジェクトのためとはいえ、突然訪れた日本人のためにこんなにも私たちが歓迎してくれたことがとてもうれしかった。

そしていよいよホームステイである。ステイ先に着くと、近所の子供たちが続々と集まってきた。みんなものめずらしそうに私の顔を見て、目が合うたびににはにかむようににっこりと笑って隠れてしまう。しかし万国共通、どこの国でも子供たちはとてもかわいい。特にネパールの子供たちの無垢で純粋な笑顔といったらない。またこちらの子供たちはとてもアクティブである。真冬にサンダルで外を駆け回り、裸足で木登りを始める。どこへ行くにもゲームを持ち歩く日本の子供たちとは大違いである。ホストファミリーや近所の子たちと戯れたあとはお待ちかね、サリジャで初のダルバート。お客様へのもてなしの意味があるのか、日本人は大食いと言う印象があるのか、ご飯の量が半端ではない。普段私が日本で食べる量の3～4倍はあるだろう量のご飯が毎回出される。“プギョ！”といっても“タルカリ〜！”といって進めてくれる。ダルバートと共に飲んだ絞ったての牛のミルクの味もたまらなくおいしかった。

サリジャでの生活は、私の日本での生活のように漠然と忙しい毎日は過ぎて行くようなものとは違い、朝、

日が昇れば皆起きだし、日が暮れると外で遊んでいた子供たちは家に戻ってくる、のどが渴けばチアを入れみんなで飲み、夜が更けると皆床につく。私たち先進国の人々のように、時間に支配されることなく、物事の中で時間を捉えているようなとてもゆったりした生活だった。村人たちは貧しい生活ではあるけれど、自分たちの生活に満足し村人全員が助け合い、毎日をいきいきと過ごしているように見えた。

しかし、グローバル化の影響がネパールの山奥まで届いているのか、20～40代の働き盛りの男性が中近東に出稼ぎに出てしまい、村にいるのは女性と子供や学生、年をとった男性である。村を中心になって支え、発展させていく年頃の男性が村にいないというのは村にとって大打撃であり大問題である。この問題は日本の地方の過疎か共通する部分があるだろう。かたや発展途上国、かたや先進国で同じ問題を抱えていることがとても不思議であり、また親近感が沸いた。

今回の旅で、私たち日本人は先進国としてアドバイスできることもあり、また逆に発展途上国であるネパールからアドバイスされるべきこともあるということを強く感じた。私たちは私たちが先進国となるまでに歩んできた歴史から、環境への配慮や産業発展の専門知識などを教えること、ネパールからは先進国だからゆえに私たちが忘れてしまっている自然と共に暮らす大切さ、家族と過ごすことの大切さなど、多くのことをお互い学び合える。お互い教え学びあいよりよい友好関係もと、今以上のよりよい未来ある生活を営んで生きたい。そんなことを2週間という短い旅の中で痛切に感じた。ネパールというすばらしい国を再び訪れる日が待ち遠しい。

5. 写真







第 20 回スタディツアー報告書

編集・発行 特定非営利活動法人ヒマラヤ保全協会

発行日 2008 年 10 月 1 日